

幼 児 時 代

— 自由としつけ —

滋谷鷲谷さくら幼稚園

松 村 康 平



問 題

大人になつてからの心理的な病氣や不幸は、その多くが、子供の頃にあやまつた取り扱ひ方をされたからだと言われる。このことは、特に、ホーマア・レインが「親と教師に語る」ところである。

ホーマア・レインは、この本（「親と教師に語る」小此木譯・日本評論社）で、子供たちを思い切り自由に振舞わすべきであると主張する。レインの考える自由は、子供たちに與えられるものであるよりも、子供たちによつてつかみ取られるもの、子供たちが自分で發見するものであり、そのような「自由」をばんだり、おさえつけてしまうことが、心理的な病氣や不幸の原因になるといふ。「自由」の生半かな解釋や理解もまた、子供たちの發達をゆがめるものになるといふ。

私たち大人は、あやまちを犯し易い。自分では子供たちに「自由教育」をしているつもりのだが、それが權威を強いる教育であつたりする。「皆んなで、散歩しましょうか。それともボールで遊びましょうか」と、そうきくだけならば無難なのに、「それとも私が面白い本を読んであげましょうか」と、子供たちが反對しにくいような抑揚をつけて尋ねる。それが子供への好意から發していても、こういう尋ね方をしたのでは、子供たちに自由な選擇をさせていることにはならない。

私たちは、とかく、大人の頭で臆立てしてから、子供を操縦しようとする。例えば、夕飯をすませて、可成りの時間がたつたから、子供たちを寝せなければいけない、子供たちの寝る時刻だと思ふ。そこで、こんなふうに尋ねる。「坊や、もう、寝るんじゃないかしら」とか「寝る時間じゃあない

の」とか。そう尋ねるのは、「お寝みなさい」と言い切るのと違つて、子供たちの自由を尊重した尋ね方だと考へる。或はそうであるかも知れない。けれど、子供たちが、「ううんまだ」とか、「まだ、いいの」とか答えると、「いいえ、もう坊やの寝る時間ですよ」と言つて、無理にでも連れていく。これはどうしたことなのだろうか。

ホーマア・レインは、子供たちの自分で出来ないような決定を強いる、そういう遣り方の誤りであることを指摘する。子供たちに選擇の自由を得させるつもりならば、子供の選擇をあくまで尊重しなければいけない。子供に自分で決定する責任を與えておきながら、子供の決定を認めない、それ位悪いことはないのに私たち大人はこうしたあやまちを犯し易い。ホーマア・レインの主張には、その根底に子供への徹底的な信頼がある。子供たちを信じて、いささかも疑わない。子供たちのもつている自己教育の力を見抜き、それを信頼し切つている。このような氣持に徹し、それを實踐出来るのは、まことにすばらしいことである。私たちも、レインのようにと、思はずにはいられない。それでいて、レインのようには實踐出来ない私たちである。これはどうしてなのだろう。

自由と「しつけ」

私たちのこれ迄に受けて來た教育が、實踐をはばむのだろうか。それとも、子供の側にその原因があるだろうか。「自由」が唱えられる他方では、「しつけ」が叫ばれる。私たちはどちらに加擔したらよいだろうか。何を據り所にして、私

たちは態度をきめたらばよいのだろうか。

一一

私たちは、幼児時代の想い出をもつてゐる。大半は忘れられ、霧の中に包まれてしまつてゐるが、今日でもはつきりと想い出すことの出来る経験を、幾ツかもつてゐる。その中には、私たちが自分の経験をそのまま覚えてゐるのではなく、周囲の人が私たちに話してきかせてくれた、そのため自分で経験したかのように覚えられてゐるものもあるが、私たち自身にとつて特に印象深かつたことが、比較的純粹な形で覚えられてゐる場合も、珍らしくない。そのような場合を、二十歳前後の男女學生の「幼児時代の想い出」の中から、選り出してみよう。それというのも、これが、「自由」か「しつけ」かの問題を考へる上に役立つと思われからであり、その何れに加擔しようとも是非必要な「幼児の心理」の理解を深めることになる、考へるからである。

三三

叱られた効果

數ある幼稚園時代の想い出の中に、一ツ、くつきりと記憶されている事實がある。それは私が、幼稚園の垣根を越して外へ出て、道端で小便をしたのを先生に見つけられ、さんざん叱られたことである。このことは、幼稚園の楽しさを想い出し先生をなつかしむ時に必ず私の記憶のどこからか出てく

る。幼稚園で先生に叱られた想い出は、この外には全くない。叱られたのは、既に十六七年前のことであるが、私のその時の心の動きは、今もはつきりと残っている。私はその行爲が悪いもので、先生に叱られるということを知っていた。しかし私はその時に、私のそばにいた友だちに、私がそのことの出来るのを、見せて、いばりたかつた。一種の英雄氣取りである。このことが、何故いつまでも私の心の中に残っているのであろうか。

當時、先生は、私が道端で用を足すという、行儀の悪いことをせぬように、導くつもりであつたに違いない。そのことは別に取り立てていう必要のない程、至極當然で些細なことである。けれど、私にとつては、それが、大きな意味をもつたのである。というのは、その頃私は、幼ないながらも善悪をわきまえていて、自分のすることを悪いと知っていたし、それを指摘されるのを、恐れていた。そうして、私の恐れていたように、そのことが指摘され、叱られたのであつた。これは、幼ない私にとつて恥と感じられたが、これがまた、大きな反省の機会となつたのである。

その時の反省は、私の生涯を通じて極めて有効に働いた。私がある後、しばしばこのような、やめたものか、したものと迷えるような葛藤場面に立たされたとき、未熟ではあつても私にとつてとにかく正しいと思われる道を歩けたのも、幼児期のある時の経験があつたからだと思われる。幼稚園の先生は、これ程まで私の記憶に残るとは、恐らく思わなかつ

たであらう。けれど、このことが私にとつては、私の人生において、非常に重要な意味をもつたのである（西田・男）。

「しつけ」の味方

このような経験をした人は、正しい「しつけ」の大切なことを説く。これを讀む人たちの中にも、「しつけ」の味方になる人が出て来るであらう。けれど、叱られた効果については、「想い出」の記録を、もう少し立ち入つて分析してみることがある。

この子供は、善いこと悪いことの區別を知っていた。そして、悪いことを知りながらおこなつた。その行いを叱られたのであつた。それだから、この場合は、子供の悪いと思うところと、大人の悪いと思うところが、一致していたのである。叱られたことへの反撥が起らなかつたのも、一ツにはこれがためであつたらう。

子供たちが悪いことと知りつつ行つた場合、それを叱つて善い行いをする方向へ「しつけ」ていくことは、望ましく思われる。しかし、私たち大人は、善いことと悪いことをはっきり區別して、子供がそれをどう思っているかにかかわりなく叱る場合が多い。

この例では、子供が、悪いことではあるがしたいと思うことをとにかくした。これが、したいことを未だしないうちに例えば、垣根をのぼりかけた時にとめられていたのだつた。どうであつたらうか。自分の力を友だちに示そうとする、その氣持は必ずしも非難出来ないのだが、垣根をのぼりかけた

時にとめていたら、この氣持はみたされなかつたであらう。そのため、悪いことをしようとして叱られたのだと理解はしても、それを素直にはききいれぬのではないだろうか。友だちに自分の出来ることを示そうとした、その氣持を握り下げてみると、いけないときめられていることを乗り越えようとする、權威への反抗も、汲み取れる。それだから、乗り越えようとしてとめられていたら、權威への反抗を高め、權威への嫌悪をかりたてたかも知れない。

このように考えてくると、子供が悪いと知りながら行う、それを叱つて、善い方向へ「しつけ」ていく、これが望ましいことに思われても、それでは、果して、どのように、「しつけ」るのがよいか。どの時機をとらえて「しつけ」たらよいか。簡單には解決し得ない問題のあることに、私たちは氣づくのである。

四

叱られなかつた効果

私の家には、胸から上のヴィーナス像がありました。それは、私の叔母が大切にしておりましたもので、いつもなかなかさわらせてくれませんでした。

ある日のこと、叔母が出かけ、祖母と私か留守番をしておりました。私は一人子で、大人の中に育つて来たものですから、外に出て皆と遊ぶことを餘りしませんでした。私はその日も家の中にいましたが、遊ぶことはないかと、二階に上り

叔母の部屋にはいりました。すると、あのヴィーナス像が机の上に置いてあります。これは？と思つて、顔をなでたり突ツついてみたりしていましたが、その机の上にインクとペンがあるのを見て、ペンをとり、インクをつけて、ちよつと突ツついてみました。すると、青い點が出来ました。それが面白くなつて、ポツポツ顔中突ツついてしまいました。

祖母は私が餘り靜かなのをいぶかつたのでしよう。二階へ上つて来て、びつくりしました。私は祖母に言われるまで、私のしていることがそんなに悪いこととは思つておりませんでしたので、平氣な顔をしておりましたが、それから、叔母の顔をみるのがこわくなつて、押入れの中にかくれてしまいました。

それとも知らぬ叔母は、おみやげに、布で出来たクマを買つて来て、私が押入れの中にいるのをみつけ、「こんな所にいるの。早く出ていらつしやい」と言いながら、おみやげのクマをくださつたのですが、私は氣がとがめて、びくびくしておりました。

ヴィーナスのある二階の部屋は、本を讀むとか、何か仕事をする時しか使わないので、その日は見つからずすみましたが、その晩に祖母が話しをしたのでしよう。翌朝になつて叔母から叱られました。でも、叔母は、「もう、あんなことをすると何もしてあげないから、およしなさい」と言うだけで、大したこともなく、私はひどく叱られると思つていたのに、そうでなかつたので、思いがけなく、とても嬉しくて、

これからはしないと、自分の心の中で思いました。この、叱られると思つたのに案外叱られないですんだ嬉しさは、今も忘れられないことの一ツです（匿名・女）。

子供の味方

この叔母は、歸宅してすぐにこの事件を、知つたのかも分らない。けれど、おびえている子供をみては、とがめる氣持にならなかつたのかも知れない。しかし、この子供が、その晩に、不安な眼りを續けたであろう、このことを思えば、叔母がその事件について早く何か言つた方がよかつたという意見も生れるであろう。しかし、更に、その事件が餘りにも激しいショックを子供に與えていたのだつたら、次の日にでも語る方がよいし、そうでなかつたら、この例にみられるような嬉しい經驗とはならなかつたであろうとも思われる。

このあたりの心の動きは、極めて微妙であり、子供の味方になつて、よりよく導こうとすればする程、導き方に心を使つて、果してどれ程の効果があるか。それが疑えてくると、よいはよい、悪いは悪いと始めからきめておいて、それにはずれたら叱るというような仕方の方が、少なくとも導く側には、はつきりしていて、樂である。この方が得策だという考えにもなるのである。

權威を立てて子供たちに臨むのも、それが必ずしも悪いことにはならない。子供たちは、權威を突き破つてのびようとする。その際に、障礙となる權威がなかつたら、更にのびのびと振舞えるであろうという主張も、輕んじないけれど、子

供たちは、障礙に出會い、それを乗り越えようとして、努力する。そこに、考える力が養われ、物事をやり通そうとする態度が、培われるのではないだろうか。

強力な權威は、こうした努力をも起させないと、或は考えられるかも知れない。けれど、自由の加擔者たちは、世の中の權威が、悉くそのように強力であり信頼し得ぬと思うのだろうか。どのような時代にも、私たちにとつて「權威」となるものは、存在し續けるだろう。そのような「權威」を乗り越えようとする態度が培われてこそ、私たちは、子供たちに社會の進歩・促進を、期待出来るのではないだろうか。

五

問題

このように考えてくると、自由に加擔する立場が、次第に權威を辨護する立場と、入れ替つてしまふ。先に述べたものでは、これとは丁度反對に、「しつけ」に加擔する立場が、「自由」を辨護する立場に移つていつた。

これはどうしてであろうか。このことは何を意味しているのか。私たちが、「しつけ」のみ主張することに、誤りがあるのか。「自由」にのみ加擔することが間違つていのか。何を據り所にして、私たちの態度をきめたらばよいのか。

なお殘されている問題について、私たちは、更に考えてみなければならぬ。(次號完結)